

## 『開発教育はいつでもどこでも！』

宮城県仙台二華高等学校 教諭 石森 広美

### ○学校現場で求められる変革

急速にグローバル化が進展する現在、その変化に対応する柔軟性が学校教育にも求められてきています。例えば、次のような点が挙げられます。

- 多様性を尊重する教育
- 教授 (teaching) から学習 (learning) へ
- レクチャー中心から能動的学習 (アクティブ・ラーニング) へ
- 教え込むことから考えさせることへの転換
- 生徒の成長, 学習への主体性を引き出す教育
- 持続可能な未来を考えさせる未来教育
- 体験や経験を重視する方向性
- 探究的な学習プロセスのデザイン

### ○「推進役」の悩み

これを実現するには、教員の意識改革 (マインドセット) が不可欠ですが、これがなかなか進んでいないのが現実のようです。開発教育や国際理解教育の「推進役」を担い、頑張ってきた教員からは、次のような悩みがよく寄せられます。

- ESD や国際理解に関する教育の価値が管理職や同僚にわかってもらえない
- 共通の価値観を持つのが難しい
- 成果があるのか、学力が身につくのか と疑問を持たれる
- 英語の教員の仕事だ、と誤解される
- 学校全体の取り組みに発展していかない
- 孤独な闘いを強いられる…

価値を伴う開発教育や国際理解教育を効果的に実践するには、特定の授業に限定せず、日常的に指導者が目標理念を念頭に置き、それを浸透させながら教育活動にあたることが大切です。あらゆる機会を捉えて学校全体で実践し、その価値を染みこませていくことが有効だと考えられており、それは学校全体アプローチ (ホールスクールアプローチ) と呼ばれています。

例えば、私の勤務校では、教室のゴミの分別 (ペットボトルのキャップ、ペットボトル、紙、カン・瓶のリサイクル)、エコキャップ運動 (世界にワクチンを届ける)、災害時における募金活動 (例えば、2015 年はネパール地震、2016 年は台湾地震、熊本地震)、毎年の文化祭での収益募金 (ユニセフ募金)、書き損じはがき回収運動 (ユネスコ寺子屋運動) などを日常的に行っています。学校のこうした雰囲気をしきりに醸成し、学校文化にすると、職員の異動があっても学校の継続的な活動として定着しやすくなります。

## ○教員自身の「引き出し」を増やす

授業、総合的な学習の時間、特別活動（学校行事、児童会・生徒会、学級活動）、部活動・クラブ活動など、実践可能な場面はたくさんあります。やりやすいところから、またはやれそうなところから、とりあえず始めてみる。そして、様々な場を「併用」していく。試行錯誤を繰り返し、経験値を高めていけば、実践者のスキルも次第に向上します。そのためには、常にアンテナを高くして、興味があつたら、あるいは疑問に思ったら調べてみたり、情報を集めてみたりすることが大切であり、こちら側の「引き出し」を増やしていくことが不可欠です。そして、情報やアイデアをまとめたり、構造化したりして、授業のアイデア集やメモのものを蓄積し、随時活用するといいいでしょう。ニュースを見たり、新聞に目を通したり、国際問題を扱ったドキュメント番組を見たり、NGOの会員となってニュースレターを受け取ったり、JICA機関誌を読んだり、関連書籍を購入したり、映画を見たり・・・不断の努力は欠かせません。私の中にはすでにベースとなる15時間～30時間分のパッケージ化された授業案ができています。これをどんどんアップデートし、イノベーションを加えています。その中から必要に応じて「中身」を取り出し、関連したテーマが出てきた時など自然な形で授業に入れ込みます。いつもの授業にスパイスのように散りばめるだけで、生徒たちにワクワク感が生まれ、思考力・判断力・表現力、コミュニケーション能力など、様々な力を伸ばすことができます。

## ○内容と方法

授業に開発教育的な内容を入れる方法と、もう一つは学び方を変える、つまり教育（学習）方法に変革を加える2通りの方法、すなわち、「内容論」からのアプローチと「方法論」からのアプローチがあると思います。

内容論からのアプローチとしては、多様なグローバルイシュー（地球的課題；人権、平和、環境、開発等）、例えば国連が主導するMDGs（ミレニアム開発目標）やSDGs（持続可能な開発目標）のテーマとなっているような、貧困、飢餓、保健・衛生、教育、水問題、気候変動、エネルギー、防災、消費、生物多様性、海洋、公正、平和や、他にも開発教育で扱われる児童労働、格差、フェアトレード、ジェンダー等、多岐にわたるテーマを取り扱うことができます。ただ、そうしたテーマ自体を教え込むことが目的はありません。鍵となる質問を投げかけ、考えさせることが大切です。

もう一つの方法論からのアプローチは、普通の授業をペアワーク、グループワーク、調べ学習、ポスター発表、プレゼンテーション、ワークショップ、ディスカッションなど、生徒主体の参加型学習、能動的学習に転換することです。教師は知識伝達者ではなく、学びを引き出すファシリテーター役。やり方を少し変えてみるだけでも、開発教育の実践に一歩近づくのです。

## ○小さなことでも、とにかくやり続ける！

- 自分の授業で
- 自分のホームルームで
- 部活動で
- イベントや大会、コンクールの周知、指導、引率

- 有志を集めた放課後学習会・勉強会
- 有志によるボランティア活動・アクション

など、できることは何かしらあります。種まきを続け、興味のある生徒を発掘し、チャンスを提供し、育てる。すると、徐々に波及効果が現れてきます。そして、関心のある教員を見つけ働きかける。いずれ組織の中に反映していければいいと思います。

生徒も教員も人間として成長させてくれる、国際理解教育・開発教育。時間的・精神的余裕がないと実践できない、とよく言われますが、自分のライフスタイルの中に入れて、楽しみながら、小さく長く、続けていきたいですね。

#### (参考文献)

石森広美 (2015) 『生徒の生き方が変わるグローバル教育の実践』メディア総合研究所。

石森広美 (2013) 『グローバル教育の授業設計とアセスメント』学事出版。